

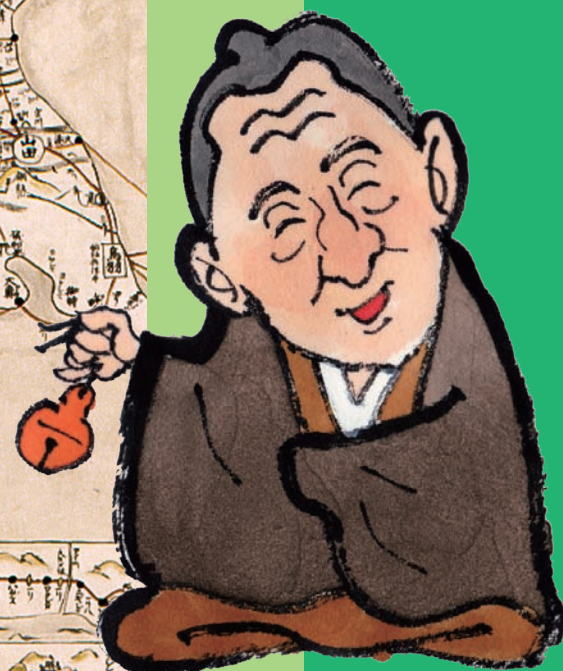


郷土の偉人を知る

1

本居宣長

もと
おり
のり
なが



松阪市教育委員会



本居宣長 郷土の偉人を知る①

平成 25 (2013) 年 2 月 1 日

発行 松阪市教育委員会

編集 郷土の偉人に学ぶ教育推進委員会

印刷 光出版印刷株式会社

はじめに

わたしたちの松阪市からは、
たくさんの方が生まれています。
松阪市の発展につくし、
人々のために努力をおしななかつた
偉人の生き方から、
多くのことを学んでいきましょう。
偉人の学習を進めることで、
ふるさと松阪を愛する心を大切にしましょう。
そして、松阪が生んだ偉人のように、
ゆめや希望を持って、
未来へ羽ばたく人になってください。

目次

一、松阪の一夜	1
二、本居宣長物語	5
三、文化の発展につくした本居宣長	11
宣長さんなんでも質問箱	18
歴史あるまち松阪（地図）	19

※年れいのあらわし方について
この冊子では、年れいは数え年であらわしています。
数え年とは、生まれた年を一才として、新年が来るたびに
一才ずつ加えて年れいを数えたものです。

編集後記

松阪市内では、江戸時代以来、地域色豊かな文化が芽生えま
した。松阪在住の商家の主人たちは、日々さまざまな文芸活動
を行いながら、江戸や京都の一流の文化人を松阪に招き寄せ、
その指導のもと松阪固有の異彩を放つ「商人文化」を開花させ
ました。その結果、国学者の本居宣長をはじめ、多彩な功績を
遺した多くの偉人を輩出しました。この冊子は、本居宣長の生
き方や考え方を学ぶための教材としてつくりました。

一章は、大正時代の「国語読本」の最高傑作といわれた「松
坂の一夜」を現代の子どもたちに分かりやすい形で提供しまし
た。もとは、佐佐木信綱の「松坂の一夜」から小学校の教科書
用に再話されたものです。国語科を中心に総合的な学習の時間
などを使って「真淵と宣長の出会いの感動」「志が高ければ、大
きな業績をなすことができること」「学問の研究は、順序正し
く進むこと」「宣長の人となりが、偉業に結び着いていること」
など松阪の子どもにはぜひ読ませたい教材です。

二章の「本居宣長物語」は、日本教育紙芝居協会刊行の紙芝
居『本居宣長』を参照し、「挫折を乗り越え、興味のあることや
得意なことを伸ばすことによって大きな偉業をなしたこと」
「才能とか時間がないということなどで学ぶことをやめないで、一
生人や物すべてから学び続けることの大切さ」に焦点をあてま
した。道徳の時間などで使用したい教材です。

三章の「文化の発展につくした本居宣長」は、地域の素材を
活用して学ぶ社会科学学習に使用できる教材です。子ども自らが、

地域の偉人本居宣長を「調べ、考え、表現する」主体的な学習
を行うことを通して、社会科学の学び方や調べ方の基礎・基本が
育てられる内容になっています。

この冊子が多くの学習の場で活用されることを願っています。

協力してくださった方（敬称略、五十音順）

賀茂真淵記念館、小林茂美、佐佐木信綱記念館、島崎良、
樹敬寺、杉坂董（故人）、富山県教育委員会、萩市教育委員会、
萩市立明倫小学校、萩博物館、長谷川治郎兵衛、
浜松市教育委員会、浜松市立県居小学校、松阪青年会議所、
萬濃正通、三宅孝史、本居宣長記念館、本居宣長ノ宮

郷土の偉人に学ぶ教育推進委員会

門 暉代司（松阪市文化財保護審議会委員）
松本 吉弘（松阪市立松江小学校校長）
山本 命（松浦武四郎記念館学芸員）
杉浦 久美（松阪市立山室山小学校教諭）
中西 祐司（松阪市立香肌小学校教諭）
近藤慎一郎（松阪市子ども支援研究センター長期研修員）
成瀬 佐和（松阪市教育委員会学校支援課指導主事）

※「松阪」の表記について

江戸時代の松阪の町は、現在より狭い地域をさして「松坂」の字が使わ
れましたが、この冊子では原則として「松阪」で統一しています。

※特にことわりのない資料につきましては、本居宣長記念館の所蔵です。



一、松阪の一夜

本居宣長は伊勢の国松阪の人である。若いころから読書が好きで、将来学問で身を立てたいと、一心に勉強していた。ある夏の半ば、宣長はいつもおとずれていた古本屋に行くと、主人は愛想よく迎えたが、手をうち、

「ああ残念なことでした。あなたが会いたいとよく名前を言っておいでになった江戸の賀茂真淵先生が、先ほどお見えになりました。」

という。あまりにも思いがけない言葉に宣長は驚いて、

「先生がどうしてこちらへ。」

「何でも京都・奈良方面の御用がすんで、これから参宮をなさるのだそうです。あの新上屋にお泊りになって、さつきお出かけの途中『何か珍しい本はないか。』と、お寄りくださいました。」

「それは、残念なことです。どうかしてお目にかかりた



伊勢の国
昔の三重県の名。

学問

今まで知らなかったことを自分で学んだり調べたりすること。

賀茂真淵

江戸時代に活躍した遠江の国（今の静岡県）出身の国学者。万葉集の研究で有名。

参宮

伊勢神宮にお参りすること。

新上屋

日野町、参宮街道沿いにある旅館。



いものだが。」

「後を追っておいでになさいませ、追いつけるかもしれません。」

宣長は、大急ぎで真淵たちの様子を聞き

とって、後を追った。松阪の町はずれまで

行っても、それらしい人は見えない。次の

垣鼻のさきまで行ってみたが、やはり追いつけなかった。宣長は力を落として、すぐ

すごともどって来た。そうして新上屋の

主人に、万一お帰りにまた泊られることがあったら、すぐ知らせてもらいたいと頼んでおいた。

望みがかなって、宣長が真淵を新上屋の一室に訪ねることができたのは、それから数日の後であった。二人はほの暗い行灯のもとで対面した。真淵はもう七十才に近く、いろいろりっぱな著書もあって、天下に聞こえた老大家。宣長はまだ

行灯
小型の照明具。木などで枠を作って紙を張り、中に油皿を置いて点灯するもの。



著書
その人が書いた本。

三十才余りあまで、温和おんわな人※となりのうちに、どこ
となく才気※さいきのひらめいている若い学者わか。年としこそち
がえ、二人は同じ学問の道をたどっているのでは
る。だんだん話をしていううちに、真淵は宣長の
学識※がくしきの尋常※じんじょうでないことを知って、非常ひじょうにたの
しく思った。話が『古事記』※こじきのことになる
と、宣長は、

「私はかねがね『古事記』を研究けんきゅうしたいと思っ
ております。それについて何かご注意ちゅういくださ
ることはございませんか。」

「それはよいところにお気づきです。私も、実は早くから『古事記』を研究した
い考えはあったのですが、それには『万葉集』※まんようしゅうを調べておくことが大切だと思っ
て、その方の研究にとりかかったのです。ところが、いつの間にか年をとってし
まって、『古事記』に手をのばすことができなくなりました。あなたはまだお若
いから、しっかり努力どりよくなさったら、きっとこの研究を大成※たいせいすることができましょ



人となり
ひとがら せいかく
人柄。性格。

才気のひらめいている
すぐさいのう おもて
優れた才能が表にあらわれ
ている様子。

学識
ちしき けんしき
学問上の知識と見識。

尋常でない
とほうもない。ものすごい。

『古事記』
さいこ
日本最古の歴史書。古代の日
本語に漢字があてて書かれて
いる。そのため読みから研究
を始めなければならなかつ
た。

『万葉集』
さいよう
奈良時代の最初の和歌集。

大成
ちせい
長時間を費やして、仕事や研究
などを完全に成しとげること。



う。ただ注意しなければならぬのは、順序正しく進むということ。これは学問の研究には特に必要です。すから、まず土台を作って、それから一步一步高く登り、最後の目的に達するようになさい。」

夏の夜は更けやすい。家々の戸はもう皆とざざされている。老学者の言葉に深く感動した宣長は、未来の希望に胸をおどらせながら、ひっそりした町すじをわが家へ向かった。

その後、宣長は絶えず文通して真淵の教えを受け、師弟の關係は日一日と親密の度を加えたが、面会の機会は松阪の一夜以後、とうとうこなかった。宣長は真淵の志をうけつぎ、三十五年の間努力に努力を続けて、ついに『古事記』の研究を大成した。有名な『古事記伝』という大著述はこの研究の結果である。

今から二百五十余年前、五月二十五日の夜、新上屋の行灯は、その光の下に語った老学者と若者とを照らした。しかもそのほの暗い灯火は、わが国の学問の上に不滅の光を放っている。



『古事記伝』稿本

『古事記伝』

『古事記』の注釈書。全四十四巻からなる。単に古典の研究にとどまらず、古代史研究に強い影響を与えた。

著述

本を書くこと。

五月二十五日

これは旧暦。現在の暦では七月五日にあたる。

稿本

本を完成するために、手直しをした本。

二、本居宣長物語

今から二百七十年ほど前の話、闇夜やみよの中を江戸※えどからの使いが、小津屋※おづやへ駆けつけました。

「江戸からの便りたよです。小津屋さん、開けてください。」

何ごとだろうと不安を感じながら家の者は戸を開けました。それは江戸の店を立※て直しに行っていた父、定利さだとしが急死きゅうししたとの知らせでした。

「お父上なが江戸で亡くなられた……。」

宣長が、十一才の時でした。宣長の家は江戸に大きな店を持っていました。父の定利が亡くなってからは、何もかもうまくゆかず、母の勝かつは、宣長はじめ四人の子どもを連れて、魚町一丁目の家へ引っ越こしました。母は子どもたちを立派りっぱに育てたいと強く願い、毎日を過ごしました。宣長も読み、書き、そろばんといろいろな勉強はげに励はげみました。読書※が好きで朝が来るまで読むことが何度もありました。地図このも好んで描えがきました。十三才からは日記も毎日のようにつけています。



江戸

今の東京。

江戸から松阪へは、当時は普通ふつうに歩くと十日はかった。

小津屋

松阪木綿しゅうばいの商売しょうばいをしていた。江戸に木綿問屋二店、たばこ屋一店をもっていた。

立て直し

店をつぶさないようにがんばること。

魚町一丁目の家

今は旧宅跡きゅうたくあととして残っている。建物は松阪公園内にある。

読書

本は高いので買ってばかりはいられなかった。借りてきて読むか、手元てもとに置いておきたい本は、写本しゃほんといつてそのまま書き写うつした。

寝るがうちも 道ゆくほども 書よまで

過るぞをしき あたらいとまを

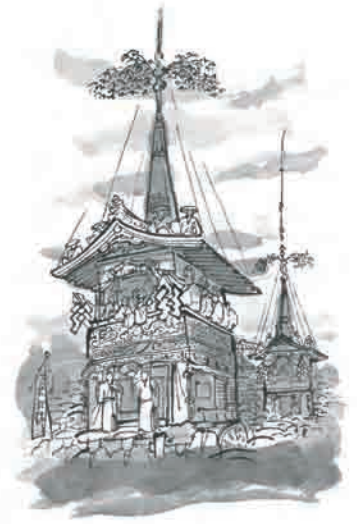
(寝るのも、道を歩くのも時間がもったいない。それなら本を読みたい。)

そんな宣長が二十三才になったある日のことです。母は実家に相談を持ちかけていました。

「宣長のことですが、ご承知のように商いにはまったく向いておらず、商人としてはやっていけそうにもありません。小津屋の立て直しも期待できません。そんなあの子ですが、たくさんの本を読み、知識を広げています。そして何より人並みならぬ学問への意欲があります。そこで医者勉強をさせようと思うのです。」

「そうか、もう普通ならば一人前の商人になってもよい年ごろ、わしも心配しておったが、医者とは良い考えじゃ。お前の言うとおり、宣長も医者としてならきつとうまくやり通せるじやろ。」
その晩、母は宣長を部屋に呼び、そのことを話しました。





「私は父上とはちがって商売はあまり得意ではありません。医者ならば人のためにもなれます。ぜひ、医者の勉強をさせてください。」

「そうか、母もうれしい。京都の有名な先生にお願いしてお前を弟子にしてもらおうとおじさまとも相談し

てある。どうか一生懸命勉強して立派な医者になっておくれ。」

少年のころからの憧れだった京都に着いた宣長は、実際に見たことや調べたことを何冊も書きとめ、医学だけでなく、儒学や和歌などいろいろな学問も学び、たくさんのものを吸収していきました。

五年半の京都での勉強を終えて松阪に帰った宣長は、すぐに町医者を開業しました。そして忙しい医者仕事のかたわら、歌会に参加し、『源氏物語』の講釈なども始め多忙な毎日を送ります。宣長は和歌を研究するうちに、日本文化の始まりにまで関心が向き、『古事記』を研究し



京都の有名な先生

堀元厚先生、武川幸順先生に医学を学び、堀景山先生に学問を教わった。

儒学

儒教。中国の孔子が考えた政治・道徳の学問。

和歌

日本に昔からある五・七・五・七・七の字数になっている短詩。

歌会

集まって和歌を詠み合う会。

『源氏物語』

一〇〇八年ごろ、紫式部という人が書いた物語。平安時代を代表する長編。

講釈

文章や言葉の意味を教えること。

たいと思うようになります。

そのころです。江戸の有名な学者、賀茂真淵

が松阪に來たということを知りつけた宣長は、

「真淵先生にお会いすれば、古典研究の助言を

いただけるかもしれない。」と、旅館をたずね、

教えを受けました。真淵と宣長が会ったのは

この一度だけでしたが、この出会いが宣長の進む道を決定づけたのです。

『古事記』は難しく誰にも読めない本でした。宣長も一番最初に出てくる

「天地」という二文字を読むのに五年ほどかかりました。宣長が古事記の研究にぼつ

とうし始めたころ、母勝と師の賀茂真淵を相次いで亡くします。同じ時期に二人の

大きな心の支えを失い、宣長の悲しみははかりしれないものでした。とくに真淵

の死により『古事記』の難しい問題を一人で解決していかねばなくなりました。

昼は医者として働き、夜は二階の四畳半

の書齋に上がり研究に集中します。頭がつ

かれてきた時は、サヤサヤと鳴る掛け鈴を



ぼつとう

一つのこと熱中すること。

書齋

勉強部屋。

掛け鈴

赤いひもで三十六個の鈴を六個ずつ六つに連ねたもの。柱に掛けて鳴らした。



鳴らして気分を変え、また研究を続けました。時にはこんなこともありましたが、

よむ書を　しばし枕に　かり寝して　うしやおぼえず　暁のそら

(本を読もうと思っていたが、それを枕に

うたた寝したらいつの間にか朝になっていた。)

宣長の二階の書斎は鈴にちなんで「鈴屋」と呼ばれ、ここで『古事記』の研究を大成していきます。

敷島の　やまごころを　人間はば朝日にほふ　山さくら花

この歌は、宣長の六十一才の自画像に書かれました。「日本人である私の心とは、朝日に照り輝く山桜の美しさを知る、その麗しさに感動する、そのような心です。」絵に向かって「外見では分からない



鈴屋

宣長の勉強部屋を鈴屋といったが、あとで宣長の家そのものをいうようになった。

本居宣長六十一才 自画像



お前の心はどのようなものか。」と問うた自分自身への回答です。

その後の宣長は、医者としてより学者として活躍していききました。日本中にいる弟子の数は五百を超え、呼ばれれば京都、名古屋、和歌山へ講釈に出かけ、時には殿様を相手に話をすることもありました。

六十九才のとき、三十五年にわたる古事記研究の成果『古事記伝』全四十四巻を完成させます。七十二才で亡くなるまで学問への

情熱は消えませんでした。

宣長は、「オのともしきや、学ぶ事の晩きや、暇のなきやによりて、思ひくづれて、止ることなかれ。

(才能とか、時間がないということなどで学ぶことをやめないでほしい。)」常に学ぶ心を持って一生、人や物すべてから学び続けてほしいといっています。



弟子
教え子・生徒。

三、文化の発展につくした本居宣長^{はつてん}

鈴を愛した宣長さん^{すず あい}

家族と出かけるために松阪駅^{まつさかえき}にやってきたななみさんは、駅の前に大きな鈴があるのを発見しました。そして

ふと足もとのマンホールを見ると、何とそこにも鈴が描かれています。不思議に思ってたなみさんは、なぜあちらこちらに鈴があるのか家族に聞いてみました。

「これらは、松阪で生まれた本居宣長という人が好きだった鈴をシンボルにしているんだよ。」と教えてもらい、宣長さんに興味をもちました。宣長さんの住んでいた家は今でも松阪公園^{こうえん}（松坂城跡^{まつさかじょうあと}）の中にあると聞いて、ななみさんは次の日曜日に友だちを誘って行ってみることにしました。

松阪公園に着くと、桜の木にかこまれた「本居宣長記念館^{きねんかん}」という建物が見えてきました。さっそく、その記念館に入っているいろいろと話を聞くことにしました。



松阪駅 JR 側にある鈴

松阪と鈴

宣長さんは、勉強で頭がつかれてきたり、研究がすすまくなったりときに鈴の音を聞いて気分をかえて、また勉強や研究をつづけた。鈴が好きだったので、教え子や浜田藩の殿様などにめずらしい鈴をプレゼントされ、大切にされた。松阪で生まれ育った宣長さんなので、それになんて松阪駅の JR 側には鈴がかざられている。その鈴は宣長さんが生まれた松阪をあらわしている。

※浜田藩

今の島根県の浜田市を中心としたところ。



松阪市内で見かけるマンホール

宣長さんが住んでいたころの松阪

本居宣長記念館に入ると研究員の西山さんが案内をしてくれました。



西山さんの説明を受ける

「宣長さんが生まれたころは、三井をはじめ小津・長谷川などの大きな商人たちが松阪から江戸に出で商売をしていました。宣長さんが書いた本の中に、『伊勢の国の中でも松阪はとくによい町で、お金持ちが多く、江戸に店を開いて、店員を大勢使い、商売はその人たちにまかせ、主人は松阪に住んでいて、楽しくゆたかにくらしていた』とあります。」と教えられてびっくりしました。

医者勉強に京都へ行く

宣長さんは、江戸時代の中ごろ、一七三〇年に松阪本町に生まれました。父は松阪木綿の問屋をしていたのですが、宣長さんが十一才の時に亡くなりました。



江戸の大伝馬町の様子（長谷川家所蔵）

江戸

今の東京のこと。三重県で松阪のあった所は、昔「伊勢の国」とよばれていた。

問屋
品物を作る人からたくさん買い集め、それを店（小売店）に売るところをいう。



宣長さんと、松阪の門人たち

そのため母や弟妹とともに魚町の家に引っ越しをしました。学問が好きな宣長さんは、母のすすめで京都へ医者になるための勉強に行き、そこで先生についてしっかりと勉強をしました。その他にも、祭り・行事・しばいや相撲などさまざまな京都の文化にふれ、多くの友だちにめぐまれました。

宣長さんの学問

やがて、宣長さんは五年あまりの京都での勉強を終えて松阪に帰りました。そして昼間は医者の仕事をして、夜は町の人たちに和歌や『源氏物語』を教えながらたくさん本を書きました。宣長さんの評判を聞きつけて、「宣長さんに会いたい。教えてもらいたい。」と全国からたくさんの人が集まってきました。ななみさんたちは、教えてもらったことなどを次のようにノートにまとめました。

文化

学問・芸術・道徳・宗教など人間の心のはたらきによってつくりだされたものをまとめて文化という。



宣長さんが使っていた「久須里婆古」



◆ ななみさんの見学メモ ◆

- ・ 宣長先生は一生に 200 冊^{さつ}よりたくさん本を書いた。
- ・ 10000 首^{しゅ}※の和歌をよんだ。
- ・ 北海道から熊本県^{くまもと}にかけて教え子が 500 人もいて和歌を教えたり手紙で質問に答えたりした。



17 才の時に描いた日本地図

・ 勉強^{ほうぼう}の方法

① 記録^{きろく}する

子どものころから大切なことを書きとめた。

② 写^{うつ}す

勉強に使う本や見たい本をかりて、筆で書き写した。

③ 絵や図にする

本で読んだことや、人の話を自分で「絵」や「図」にかきかえた。

ただ写すだけではなく、自分で調べたりしてより良いものをつくろうとした。

④ 集めて分ける

いろいろな本から「知りたいこと」を集めて、後で見たときすぐわかるように分けてならべた。

◆ しゅんさんの見学メモ ◆

- ・ 着物をきていた。
 - ・ 墨^{すみ}を使って筆^{ふで}で字を書いた。
 - ・ 桜^{さくら}（山桜）が好き。
 - ・ 子どものころから本が好きだった。
 - ・ 歌を書く紙（短冊^{たんさく}）がつくえの上にある。
 - ・ 医者、研究をする人。
 - ・ つくえの上の本は『古事記伝^{こじきでん}』だろうか。
- 『古事記伝』という本ができるまでに大へん苦労して、35 年もかかった。全部で 44 冊ある。



44 才の時に描いた自分の絵

首…和歌を数える時の単位^{たんい}。



「松阪の一夜」で会った宣長さんと賀茂真淵先生（本居宣長ノ宮所蔵）

宣長さんは賀茂真淵先生の本を読み、
※かものまぶち
会いたいと思っていました。

一七六三年、新上屋という旅館でた
※しんじょうや
だ一度会って真淵先生に励まされたこと
※はげ
がきっかけとなり、日本で一番古い歴史
の本といわれる『古事記』の研究に取
※けんきゆう
りかかります。そして、三十五年もの長
い期間の努力の末にくわしい
※どりよくすえ
読み方や意味、説明などをくわ
えて分かりやすくした『古事記
伝』という本を完成させました。
※かんせい

この本は、二百年以上たった
今でも国学を学ぶもとなる本



本居家に伝わるいろいろな種類の鈴

国学

『古事記』などの古い本を調べて、外国の考え方の影響をうける前の日本人の昔の姿や物の見方、考え方を明らかにしようとする学問。

賀茂真淵

江戸時代にかつやくした遠江の国（今の静岡県）出身の国学者。

新上屋

日野町にあった旅館。今でも、その場所がわかるようになっている。



「歴史漫画 鈴せんせい」の本

として、とても価値があるということで大切にされています。また、多くの学問の手に本にもなり、日本中の多くの人々に影響を与えました。

本居宣長記念館には、日本中だけでなく外国からも、たくさん見学する人や勉強する人が訪れるということです。

ななみさんたちは、小学生も参加して作

られたという『歴史漫画 鈴せんせい——本居宣長のすべて——』という本を西山さんから紹介してもらいました。そして今度は松阪市内の宣長さんに関係のある主な史跡に行ってみようと計画しました。



本居宣長記念館

『歴史漫画 鈴せんせい』松阪青年会議所から刊行された。

史跡

本居宣長に關係する家・お墓・碑など歴史の上で価値のあるものが松阪市内にはたくさんある。

宣長さん年表

西暦	年齢	おもなできごと
一七三〇年	1	松阪本町で生まれる
一七四〇年	11	父が亡くなる
一七四一年	12	母、弟妹と魚町にうつる
一七四五年	16	江戸へ商人の勉強に行く
一七四八年	19	商家に入る（二年後に戻る）
一七五二年	23	京都へ医者勉強に行く
一七五五年	26	「宣長」という名前を使い始める
一七五七年	28	松阪にもどり医者始める
一七六二年	33	結婚する
一七六三年	34	賀茂真淵先生と出会う（松阪の一夜）
一七六四年	35	『古事記伝』を書き始める
一七八二年	53	書齋「鈴屋」ができる
一七九〇年	61	『古事記伝』刊行開始
一七九二年	63	※紀州藩徳川家に仕える
一七九四年	65	長男春庭の目が見えなくなる
一七九八年	69	『古事記伝』が完成する
一八〇一年	72	九月二十九日に亡くなる（今の十一月九日）

この本には、
地図ものせてあるので、
みなさんもぜひ、
実際に見学に
行ってみてくださいね。



やまむろやま 山室山にある宣長さんのお墓（奥墓）



じゅきやう 樹敬寺にある宣長さんのお墓



刊行
本などを印刷して世の中に出
すこと。

紀州藩
今の和歌山県から三重県にま
たがるところは、徳川家が領
地として治めていた。

仕える
殿様に認められて仕事をする
こと。



宣長さんでも質問箱

Q 宣長さんは小さいころ、どんな夢をもっていましたか。

A 少年時代から京都には強いあこがれをもっており、いろいろな本の中から京都の名所についてぬき出して、六冊もの本を自分でつくったほごです。その京都へ勉強しに行けるようになったのですから、ここでの一つの夢が実現したようなものです。

Q 宣長さんの苗字が、変わったと聞きました。本当ですか。

A 学問と医者で生活しようと決めて、京都へ勉強に出た時から、商家であった時の小津をやめ、武士だった先祖の苗字「本居」を使うようになりました。

Q いつから学者になろうと思ったのですか。

A 伊勢の紙問屋の養子になっていたころの日記に、商売のことより「和歌がすきだ」と書いています。もうそのころに、学問が好きだったことは確かです。

また学者になるとは考えていなかったのですが、紙問屋からもどったあと、お母さ

んがこの子は商人向きでないともみて、京都へ医者になる勉強に送り出しました。

Q 医者としての宣長さんについて教えてください。

A 宣長さんのメモによると、子どもだけではなく、役人や商人、弟子、近くの農村の人たち、それにお伊勢参りの旅人など、いろいろな人を診察しています。

Q 宣長さんは、松阪公園にある鈴屋に住んでいたのですか。

A 松阪公園にある鈴屋は、一九〇九年、火事などの危険から守るため、魚町からそっくりそのままうつしたものです。ここを見れば、台所やお風呂のようすもわかります。それほど広くはないのに、家族が生活し、病人も診察し、夜は弟子たちが集まってきて学習会を開いていました。

Q 背の高さはどれくらいですか。

A 宣長さんが自分でデザインして着ていた「鈴屋衣」(着物)から考えると、

一メートル七十センチくらいです。当時としては、背が高かったのです。

Q 宣長さんはどうしてそんなに有名な人になれたのですか。何才なる有名な人になったのですか。

A 失敗をのりこえて、年月長く、根気強くはげみつとめたこと。そして、常に学ぶ心をもって、一生人や物すべてから学び続けたからです。

学者として有名になりはじめたのは五十才をこえ、弟子が急にふえたころです。

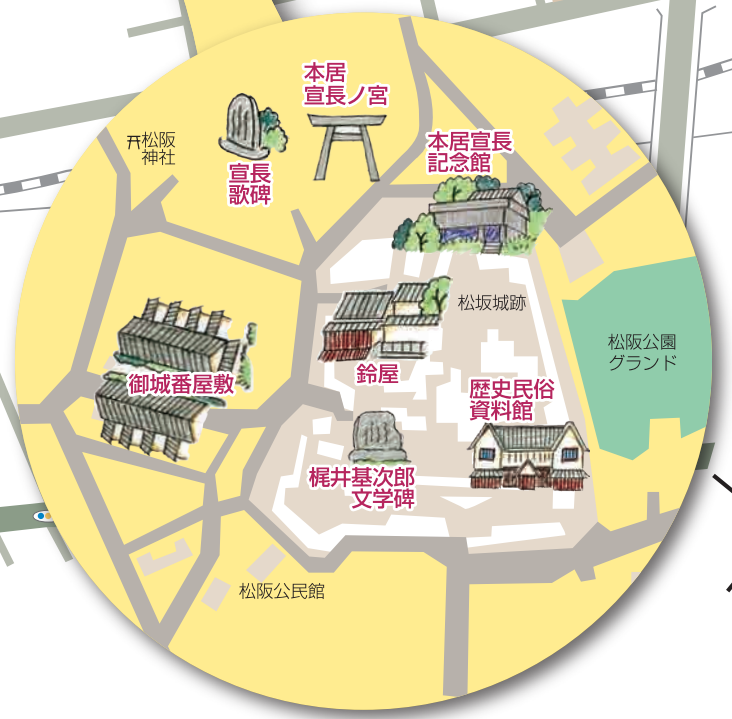
Q どうしてお墓は二つあるのですか。

A 新町の樹敬寺にあるお墓は、お参りしてもらいやすいためにつくりました。また、山室山は宣長さんにとって、とても好きなところで、そこに桜の木を植えて、お墓を作りました。





歴史あるまち 松阪





まつさか え ず もとおりはるにわひつ
「松坂絵図」本居春庭筆